

## 『豊饒の海』論

—— 転生へと展げる読解の可能性 ——

太田雅子

松枝清顕から飯沼勲、ジン・ジャンへと引き続き転生を見届けてきた本多繁邦は、さらにその生れかわりらしき人物に出会う。安永透であった。本多は、透の左脇腹に並んだ三つの黒子を見つけ、彼を養子にしようと決めるのである。「ひよつとすると、あの少年は、はじめて本多の前に現はれた精巧な贗物なのではあるまいか。」という疑いを僅かに残しながら……。このようなささやかな疑いから、透は贗物の転生者なのではないか。あるいは、それ以前から贗物性は存在しているのかもしれないといった疑いは、それぞれの論考に度々顔を見せることはあったが、その一方で、合理性によって一連の転生を疑ってみようという試みもなされてきているのは事実である。それは長谷川泉<sup>(注1)</sup>によって僅かに提示され、對馬勝淑<sup>(注2)</sup>、ほぼ時を同じくして佐藤秀明<sup>(注3)</sup>によって大々的になされた。

しかし、本論はそれらを反転し、本来約束されるべき輪廻転生を読みとっていくものだ。また、一連の転生と唯識論との関わりについては、「松枝清顕にはじまる行為<sup>(注4)</sup>、者の『主人公』の輪廻転生の流れと、本多に体现される唯識の認識論との対立こそが問題なのだ。」という立場をとりたい。それはつまり、唯識の体系に基づいて転生を理解しようとする試みが、従来主としてなされてきたわけだが、唯識というのは本多が転生を解釈する基礎的理論にすぎなく、

何も物語を論じる側としては、本多と同様の手段をとる必要はないということなのである。

## 一、慶子の使命

ジン・ジャンの死から十五年余り経ったある日、本多は慶子と連れ立って三保の松原を訪れる。そしてその帰るさ、  
「まだ見るところはないか」と慶子にせがまれ、帝国信号通信所に寄ることになる。そこには、左脇腹に三つの黒子をもつ少年(透)がいた。しかもこの少年は、ジン・ジャンの生れかわりならそうあるべき十六歳なのである。このジン・ジャンの次なる転生者だと思われる少年と遭遇した夜、本多は、慶子に自分の見てきた清頭以来の一連の転生について打ち明け、少年を養子に貰う理由を説明する。ところで、この一見、自分とは全く縁の無い夢の物語を聞いて、慶子の心に思い当るのは、本多の見てきた転生の三番目の人物、かつてレスビアン仲であったジン・ジャンのことだ。そのジン・ジャンが、本多の話に拠れば、今日会ったあの少年に生れかわったというのである。ジン・ジャンの生に接し、次にその生れかわりだという透と本多が出会うのに立ち会うことになってしまった慶子は、否応無しに本多から語られる物語を端緒として、自分が果たしてきた役割について悟らざるをえない。その役割とは、慶子自らが本多をジン・ジャンから透へと導いたのではなかったか、ということだ。

本多が帝国信号通信所を訪れることになったのは、慶子がいることに勇氣を得たからである、という点に注意したい。というのは、それ以前に行った時は、「一人で扉を叩く勇氣のなかった」まま帰ってしまった本多がいるからである。また、そもそも帝国信号通信所まで来た本多の理由は何だったのだろう。慶子の「今お話を『羽衣』をあげたところなのよ。でも私、三保の松原をまだ見てゐないのよ。本当に日本の中で見てゐないところが多くて恥かしいわ。

「二三日内に一緒に行つて下さらないこと？」という誘いからだったのだ。そしてその誘いも、慶子の急な日本趣味に起因するものだった。

キヤナスタはともかく、慶子は概ね、日本文化の研究に精を出すやうになつてゐた。それが彼女の新しい異国趣味であつた。慶子はこの年になつてはじめて歌舞伎を見はじめ、つまらない役者に感心して、フランスの名優を引合に出して褒めたりした。謡を習ひ出したり、密教美術に凝つてお寺めぐりをしたりするやうになつた。

### 『天人五衰』第七章

このように、帝国信号通信所に来るまでの慶子について整理してみると、その存在は、本多が帝国信号通信所に辿り着くためには、なくてはならなかつたと言えそうである。さらに、帝国信号通信所における慶子にも注目してみたい。そこでは、慶子は四十に区切られた棚にそれぞれ旗が納められてゐるのに目を止め、少年に見せてくれるやう頼むのだが、正にこうした最中、本多は旗を取ろうと伸び上る彼の左脇腹に、三つ並んだ黒子を発見してしまうわけなのである。この場面では、もし慶子が旗に興味を示さなかつたとしたら、本多は透の転生についての決め手となる黒子を見ることが出来なかつたのではないかといった疑問が生じる。

ところで、『奔馬』で勲と、『暁の寺』で幼いジン・ジャンと出会うことになつたのが偶然であつたように、本多が透へと辿り着いたこの場合も偶然の出来事として片付くのであろうか。偶然の介在する余地がそこにあつたとしても、それには慶子が関与することなくしてはありえない。とすると、これは必然の成行きなのか。慶子という存在、その言動が結果的に本多を透へと接近させることを目指していたなら、慶子がある意志をもって行動していた可能性が無いとは言ひ切れないからだ。慶子の本多を透へと導く行為が必然性を伴つたものであるということ、そうであるなら、慶子が本多から打ち明けられる以前に、転生について何か知っていたという想定が可能となつてくる。慶子が、本多

から転生の話を聞かされる以前にその情報を得ることが出来るのは、転生者本人、ジン・ジャンからでしかない。しかしジン・ジャンは、自分が本多の友人であった清頭以来の転生者であるのを知ることにはない。従って、何も知らないジン・ジャンから慶子はある（転生についての）情報を得て、それを基に行動した結果、ジン・ジャンの次の転生者、透へと本多を招き入れてしまったことになる。そしてこのことを、慶子がジン・ジャンから次なる転生の予告を何らかの形で聞いたことがあったのではないか、といった想像にまで高めることは果たして無駄なことであらうか。一方、慶子も、ジン・ジャンが清頭以来続く転生上に位置しているということを知っていたとは思われない。ジン・ジャンが転生の予告をしてもそうとはとらず、何か別のメッセージとして受け取り、ジン・ジャンの死後、それに基づいて行動したとも考えられる。その結果として、本多を次の転生者である透へと導くことになったのは有り得べきことだ。そして本多の転生の話によつて、慶子はジン・ジャン以前の転生についても知ると共に、自分が本多を透へと導いた行為が何を根拠としていたのか《知ってしまった》とは言えないか。

しかし、ジン・ジャンが転生の予告をしたと仮定すると、それは一体どのような状況設定で起こりうると考えられるのか。本多が清頭と勲から聞かされた転生の予告——『又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で』——ずつと南だ。ずつと暑い。……南の国の薔薇の光りの中で。……——は、彼らが寝ている時、本多がそのそばに付き添っているという形でなされた。清頭の夢日記を見るより先には夢の内容を知らされない本多は、夢に対する情報を読者程持ち合わせていない。清頭の場合、病に苦しむ床から聞いたものがその唯一になっており、勲においては、その生が夢日記の内容によつて保証されるものの、その自ら示す次なる転生の予告は、酔いに早くも寝込んでしまったその寝言からであった。けれども、ジン・ジャンは女である。その寝ている傍らに本多がいるという想定は、ジン・ジャンが年頃に近ければ近い程、困難が付き纏う。それ以外のどのような形で、ジン・ジャンは夢告の機会をもつことが出来るのか。

ここで、当初予定されていた『暁の寺』のジン・ジャン像とはどのようなものであったか、当時「新潮」で、『豊饒の海』の編集担当であった小島千加子が、それについて興味深い記録を残しているので見てみたい。<sup>(注6)</sup>

「暁の寺」の後半は、成人したタイ王族の姫君と本多との再会を軸とし、敗戦後数年を経て安定を取り戻した東京を舞台に、愛の種々相を、多様にくり広げようといふ絢爛さが予定されてゐる。(傍点引用者)

これは、小島が三島から聞き知ったと思われる『暁の寺』後半の予定であるが、「愛の種々相を、多様に」とはどういう意味なのか。現在の筋でいう、本多の一方的な恋のことを言っているのだろうか。小島はこの後、ジン・ジャンのモデルであったタイの留学生が約束をスッポかすという事件が起きたことを記し、それによって三島が、作品上の変更を余儀無くされたと語る。その変更を示す三島の言葉は次のようにある。

『ちやうどいい。<sup>(注7)</sup> ちよつとやり方を変へることにした。本多は留学生として日本に來た月光姫に逢はうとして、いくら約束してもスッポかされる。逢はうとしても逢へない。そのうちに逢へない月光姫への想いが昂じてゆく……さうしよう』

それは、「第三巻の取材のために、東南アジアへ二度旅行をしたほか、国内の取材にさまざまな方のお世話になった。私の取材はひとへに小説のミリユーを大切に<sup>(注8)</sup>するためである。」と、また、「異国趣味と夢幻の趣味とは、文学から力を失はせると共に、一種疲れた色香を添へるもの<sup>(注9)</sup>」と認識していた三島が、取材無し(モデルの不在)でしかも「異国趣味」という、ジン・ジャンを扱うことに危険を感じたゆえの成行きだと理解できる。次に創作ノート『豊饒の海』ノート<sup>(注10)</sup>を引用する。ここでは、全体の構想と各巻ごとの構想とに分けられるが、『暁の寺』に関する部分について見てみることにする。

「大長篇」ノートより

第三部（第一部から第三部まで六十年。副主人公も六十歳）

タイの王室の女、戦後の女、死なぬ、生きのびて、六十歳になった男と結婚し、子を生む。その二人が第一部、第二部をくりかへす。（傍点引用者）

『暁の寺』ノートより

聡子とそっくり同じ顔の女に惚れる。レスビアニズム

これは前々世ゆゑ、お姫様自身にも理由がわからない。

本多は、尼の聡子に会はせぬやう配慮する。（前後略）

後者は同様なものが三度程書かれた内の最初のものである。この創作ノートで気づくことは、前者と後者との間に大きな違いがあることだろう。創作過程において、四巻の構想を大まかに掴んでから各巻の細部へ移る、と仮定するなら（ほぼ間違いは無いと思われる）、この前者の「大長篇」ノートが書かれた後に、先に述べたモデル不在の事件が起き、後者の『暁の寺』ノートに練り直されたとは言えまいか。そしてこのような過程を経て、小島千加子の言う「愛の種々相を、多様に」は、「大長篇」ノートの「タイの王室の女、戦後の女」「六十歳になった男と結婚し」と共に消失してしまつたと言えるのである。以上のことを考慮に入れると、本多がジン・ジャンと関係をもつことは（結婚するわけだから）あつたということになり、従つて、ジン・ジャンから次の転生の予告となるものを聞く機会も、当然本多に与えられることになつたと考えられる。だが、それは飽くまでも創作ノートの、作品には活かされること無く消失してしまつた記録であり、作品以前の域を出ることはない。

それなら、本多が聞くべきジン・ジャンの夢告は、誰が聞くことになつたのであろうか。第三巻『暁の寺』から、第四巻『天人五衰』に至る道筋を振り返ってみると、どうも慶子という存在無くしては物語の成立は考えられない。

慶子が物語を先導する重要な担い手であるという事実は曲げようがないのだ。慶子は、ジン・ジャンとレズビアンの関係であつたわけであるし、それが発覚する以前には、本多からジン・ジャンの機嫌を取り成してくれるよう頼まれて、本多を跪かせたこともある。慶子の日本趣味への傾倒から、本多は彼女と連れ立って三保の松原へ行き、帝国信号通信所を訪れ、透と出会うことになった。そして、慶子の好奇心ゆえに、転生の証である透の黒子を発見したことは先に述べた。つまり、慶子がジン・ジャンからの夢告を本多の代りに聞くことがあつたのではないか、ということが疑いとして出てくる。本多の代りにジン・ジャンと関係をもつことになつたのは、紛れもない慶子自身なのだから。そして本多を透へと導いたのではなかつたか。ジン・ジャンを透へと繋ぐ鍵が慶子の手に握られていた。その結果として、慶子は結局は本多を、透という次なる転生者へと招き寄せる役割を担ってしまったのである。こうして、本多が転生について語ることによって、慶子はジン・ジャンと透を結びつけた力の源が何に拠っているのか、『知つてしまふ』ことになる。

本多は、転生の話をしてしまつてからこう続ける。「しかし女として致命的なことは、もうこれを知つてしまつたら、知つた者は二度と美しくありえないといふことだよ。」さらに、慶子に「見者の五衰」が表われるだろうと预言する。

「見者の五衰」とは、本多自身が命名したであろうと思われる、本多自身をも指す言葉である。その定義とは、

肌は異様に透明になり、魂がびたりと停止してゐるのが透いて見え、肉の美しさが失はれて肉が肉それ自体として忌はしくわだかまつてゐるのが見え、声が嘎れ、落葉のように全身の毛が脱け落ちて来る。（『天人五衰』第十

## 二章）

というものだ。これは、若さゆえに存在する『天人』（ここには勿論、一連の転生者が含まれている）に対して、年を重ねゆく内につい物事を知り過ぎてしまつた、『老人の五衰』と言うべきものだと考えられる。それは、生と逆

の方向から（つまり死の方向から）の見方が一度その身に備ったら離れないものであることを示していると思われる、本多は慶子にも、この仲間入りをさせようという魂胆らしい。一方、本多の目論見とはややずれがあつても、慶子の意識には、ジン・ジャンを透へと結びつけた自分の力が何に拠っているかを《知ってしまった》、という「見者の五衰」が離れない。慶子がこの「見者の五衰」を回避すること、それは自身を《知らない者》へと転化させること。もし本多の語った転生の話が事実であるなら、それを何も聞かなかった、あるいは、聞いたことは全て間違ひだったということではなくてはならない。従つて、「今日会つたあの少年にこのことは絶対に秘密にしておくべきね。二十歳であの子が死ぬまで」という言葉は、当然裏切られなくてはならない。透を本多の言う通りに生れかわりだとするわけにはいかないのだ。「見者の五衰」から逃れることが本質的に不可能だと分っているなら、慶子は、自分自身をも欺こうとしているのだろうか？

やがて起こる、本多の目を逃れての慶子の密告は、透にとつて、「今まできいた荒唐無稽な話を信じるか信じないかはともかく、それと自分との関わりが何の意味もないと云はれることは、透の存在理由に対する慶子のあらはな無視を暗示してゐた。」のであり、「あなたはきつと贗物」「あなたがなれるのは陰気な相続人」と、益々慶子は透の自尊心を痛めつける。慶子には、「他人を蟲けら同然に扱ふ能力が具はつてゐた」から、それを行使しようと思えば幾らでもそうすることが出来たのである。他方、透にとつて、《自尊心をしっかり持つこと》は信条であつたはずだ。狂女絹江の妄想に論理的加担をする時、そう言つて締め括つたのであるし、彼の家庭教師だった古沢はその念押しをした。透に対して、「身を滅ぼすほどの自尊心」を持てというのだ。勿論、透はその時、持っていると心の中であつたのであつたが……。そのような透を言い負かした慶子の力は、持ち前のものとはいへ、本多との友情だけに基づいているとは到底考えられない。本多にとつて、転生は一生の大半を費してまで見守つてきたことなのだから、もし慶



子が友情を大切にするつもりなら、本多と透との間に介入することは、極力避けるべきであつただろう。あるいは、本多との友情が大切なものであつたからこそ、慶子は透の仕打ちに憤りを感じ、透と直接対決することを望んだと考えることの方が、この場合妥当なこともしれない。けれども、透は後数カ月程で二十歳という転生の期限を越えてしまうのである。それなのに何故、慶子はそれまで待つことをしなかつたのか。やはり、転生を看過することは、やがては我身に「見者の五衰」の烙印を押し付けていくであろうということに我慢ならなかつたのではないか。

## 二、透の本物性

透は、慶子の勧め通り、夢日記を見る。夢日記は松枝清顕によつて書かれたもので、彼の死後、その遺言により友人の本多繁邦に託されることになった。そして、本多の転生を判断する材料の一つとして、その存在を主張してくることになる。清顕の次なる転生者、勲についてはおろか、さらに次のジン・ジャンに関してまで言及してあるものであつた。その夢日記が、さらなる転生者である透に渡されたのである。夢日記に、透に関する記述があるとは、物語中には記されていない。また、「はじめて本多の前に現はれた精巧な贗物なのではあるまいか。」という疑いを本多に抱かせているところを見ると、透と夢との繋りが無いことを暗示しているようでさえある。しかし、そのことによつて透を贗物だとするのは、速断とも言うべき誤ちであり、透の本物性を証明する動かし難い事実が透の行動の内に隠されていることを見逃してはならない。それは以下に示す二点で説明がつくのではないか。

まず一つは、透は過去世を垣間見た時があつたということである。ジン・ジャンの記憶と思われる風景を、海上からの日の出寸前に見てしまうのだ。

日はまだ現はれないが、現はれるべきところのすぐ上方に、肌理きりのこまかい雲が、あたかも低い山脈の連なりのやうな上襞やまひだの褶曲せききよくそつくりの形を高肉浮彫こつてきうにしてゐる。(中略)そして山脈の浮彫は、薔薇いろの雲の反映を山裾にまで受けて、匂うてゐる。その山裾には人家の点在まで想ひ見られ、そこに薔薇いろに花ひらいた幻の国土の出現を透は見た。

あそこからこそ自分は来たのだ、と透は思つた。幻の国土から。夜明けの空がたまたま垣間かひま見せるあの国から。

### 『天人五衰』第五章

さらに、透の見る過去世は時を遡る。それは勲の最期を思わせるものだ。

そのとき透の望遠鏡は、見るべからざるものを見た。

顎あぎとをひらいて苦しむ波の大きな口腔の裡に、ふと別な世界が揺曳したやうな気がしたのである。透の目が幻影を見る筈はないから、見たものは実在でなければならぬ。しかしそれが何であるかはわからない。海中の微生物がたまたま描いた模様のやうなものかもしれない。暗い奥処おくがにひらめいた光彩が、別な世界を開顕したのだが、たしかに一度見た場所だといふおぼえがあるのは、測り知られぬほど遠い気憶き憶と関はりがあるのかもしれない。過去世といふものがあれば、それかもしれない。ともあれそれが、明快な水平線の一歩先に、たえず透が見通さうと思つて来たものと、どういふつながりがあるのかわからない。(中略)が、そこに光明があり、閃光が走つたのは、稲妻に貫かれた海中の光景だつたのだらうか。そんなものが、このおだやかな西日みぎはの汀に見られよう筈はない。第一、その世界がこの世界と同時に共在してゐなければならぬといふ法はない。そこに仄見えたのは、別の時間なのであらうか。今透の腕時計が刻んでゐるものとは、別の時間もとの下にある何かなのであらうか。

### 『天人五衰』第十三章、前部傍点引用者

右の記述に見える「そこに光明があり、閃光が走つた」とは、勲が自刃する時の「正に刀を腹へ突き立てた瞬間、日輪は臉の裏に赫奕と昇つた。」との描写に、関連性を求めるところが大きいだろう。また、清頭に関するものとして、何の鳥だつたらう。あまり永く見詰めてゐるうちに、その黒い羽根の固まりは、鳥ではなくて、女の鬢のやうにも思はれたした。『天人五衰』第二十四章)

という箇所があるが、これは透が手記の中に記したもので、ある雪の日のことである。その日、透は家にいて窓から外を眺めていると、家の前に老人が現れ、何か黒い鳥のようなものを落していったのである。このことは、清頭の恋人、聡子がつけることになるかもしれない。鬢の話を出させ、かつ、この雪の上に落ちた黒い固まりから、清頭の憧れた白い項と黒い髪との対比をも連想することが可能である。

時折鏡を見て、自分の微笑の漂ひをよく調べると、鏡にさしかかる光りの加減で、少女の微笑に似てゐると感じられることがあつた。どこか遠い国の、言葉の通じない少女は、こんな微笑を、他人との唯一の通ひ路にしてゐることがあるかもしれない。『天人五衰』第十四章)

以上三つの過去世を透は見た上に、彼の微笑はジン・ジャンのものではないか、という問いかけがなされるのである。そして、こうしたものが透の中で未解決のまま位置付けられ、いよいよ決着のつく時が来たのだ。夢日記を見れば、つまりそれが、一つ一つ符合したのである。慶子の話術によれば「荒唐無稽」であると感じた転生の話が、この時着実に透の内部に根を下ろしたことは言うまでもない。

透の見た過去世は、夢日記の記述と相俟つて、転生について確証を与えるものとなった。けれども、透の本当に見たかったものとは、どのように決着がつくべきものであつたのだろうか。透が見ることを願つたものとは、言葉を尽くすよりもまず、次の箇所により見出されるであらう。

存在と目が出会ふことが、すなはち存在と存在とが出会ふことが、見るといふことであるなら、それはただ存在と目の合せ鏡のやうなものではあるまいか。さうではない。見ることは存在を乗り超え鳥のやうに、見ることに翼になつて、誰も見たことのない領域へまで透を連れてゆく筈だ。(中略) 永久に船の出現しない海、決して存在に犯されぬ海といふものがある筈だ。見て見て見抜く明晰さの極限に、何も現はれないことの確実な領域、そこは又確実に濃藍で、物象も認識もともに、酢酸に涵された酸化鉛のやうに溶解して、もはや見ることが認識の足枷を脱して、それ自体で透明になる領域がきつとある筈だ。

そこまで目を放つことこそ、透の幸福の根柢だつた。透にとつては、見ることに以上の自己放棄はなかつた。自分を忘れさせてくれるのは目だけだ。鏡を見るとときを除いては。(『天人五衰』第三章)

しかし、結局透が見てしまったものの、それは過去だつたのだ。《存在が存在と出会い、犯され合い、それが堆積して記憶として止ることを許す過去》だつたのだ。透は勲の最期と思われるものを見た時、「過去世といふものがあれば、それかもしれない。ともあれそれが、明快な水平線の一步先に、たえず透が見通さうと思つて来たものと、どういふつながりがあるのかわからない。」とその心中を明かしているが、実は全くその対極に当たると言うべきものを見てしまったのであり、透の目が掴んだものは、存在の手垢にまみれた代物にすぎなかつたわけである。ここで透は絶望する。自分が水平線の向こうを見ようとした結果、見てしまったものは、過去でしかなかつたのかと……。透の自殺は未遂に終り、命は取り止めるが失明する。透が本物の転生者であるということでも、敢えて自己正当化の自殺とここで言ってみるなら、それは、透が本当に見ることを望んでいたもの——過去ではなく、水平線の向こうにあるもの——を見たのだということを目指しているとは言えないか。つまり、自殺の果ての失明こそ、透の自己正当化とつて相応しいものであつたと考えられるのである。しかし、あるいは、盲目の闇の中にあつてこそ、透は自分の見るべ

きものを見たかもしれぬ。「不可視のものを『見る』とはどういふことか？ それこそ目の最終的な願望、見ることによるあらゆる否定の果ての目の自己否定なのだった。」と、透自身、その手記で書いているではないか。

透が本物の転生者であるということを立証する二点目の眼目は、《透は、一体何につかまれていたのか》ということだ。慶子によれば、「松枝清顕は、思ひもかけなかつた恋の感情につかまれ、飯沼勲は使命に、ジン・ジャンは肉につかまれてゐました。あなたは一体何につかまれてゐたの？ 自分は人とはちがふといふ、何の根拠もない認識だけにでせう？（中略）己惚れた認識屋を引張り出しに来るのは、もつとすれつからしの同業者者だけなんです。」と言われるものも、ただ透の自尊心に打撃を与えるためだけの、転生の本物性を疎外しようとする中傷にすぎなかつたのは、一章で既に述べた。しかし、そうは言っても、確かに透は少々「己惚れた認識屋」だ。けれども、それが当たっているにせよ、《何につかまれてゐるのか》といった、対象とすべきことは別にあるように思われる。清顕、勲、ジン・ジャンと、それぞれの転生者について遡って追ってみると、本多と関わってから後に《何につかまれてゐるのか》という運命じみたものが、各々の転生者の身に具っていくことは理解できる。すると、透の場合、「認識屋」というレテルは本多と会う以前から貼られうることは明らかであり、因って、透が清顕に始まる転生上に位置するなら、それ以後の透の行動に、《何につかまれてゐるのか》に表わされるものが見つかるはずである。しかもそれを探し当てるのは読み手自身であり、慶子の言説に騙されて、透を単なる「認識屋」にすぎないとするのは大きな誤りであるといえよう。それでは、透は《何につかまれてゐるのか》というのか。本多と出会ってからの透を追いつつ見ていきたい。

十月末のある日、本多は洋食の作法を透に教える。食べながらも適度に喋べるようにと指示する本多は、自分を世間の偉い人と仮定して、透に会話の仕方をも学ばせる。「ちつとも友達を作らうとしないのは何故だらうね」「別に友達をほしいと思ひませんから」「そら、その返事がいかん。それだけでお前は、世間へ白い眼を向けてゐる変り者と

思はれる。」また、イタリア美術では「マンテーニヤ」が好きという透に、こう訓示が与えられる。「子供のくせにマンテーニヤなんてとんでもない。それに相手はおそらく名前も知らないから、さう答へただけで不快な印象を与へて、お前は知ったかぶりの小才子と思はれる。かう答へればいいのだ。『ルネッサンスは素晴らしいですね。』言つてごらん」(『天人五衰』第十七章)

ここで透は、会話の処理の仕方を学ばざるをえず、そして、約一カ月後(十一月下旬)にはそれが身についてしまつたと思われる。そのことを示す、約一カ月後の透と家庭教師、古沢との遣り取りは次のようである。

「自尊心はがつちり持たなくちやだめだぜ。身を減ぼすほどの自尊心をね」

それを持つてゐると言はうとするのを抑へて、透は、

「はい」

と言つた。どんな返事も、一度口のなかでしゃぶつて試してみる習慣がついてゐた。自分で甘すぎると思つたら、嘸み込んでしまへばよい。(『天人五衰』第十八章、傍点引用者)

こうしたように、本多に教えられたことが透にとって「習慣」になつてしまつた、ということが、ここから分るのである。

ところで、透と云えば、その手記がかなりの頁を費やして物語の一部を成していることに気づくのであるが、そこからも、「習慣」づけられた透の行動を読み取ることは可能である。認識するだけではなく、それを一般的に行動ではどうとるべきか、どういつた相手に対し、どういう態度がどう受け取られ、どう思わせることが出来るか、まで発展させる。全ては本多の教育の賜であり、それを、手記に記された透の行動の内にありありと見出すことが出来るのである。というのも、この透の手記は、透の百子に対する認識を行動へと移行させる計画書であり、かつその過程が

書き込まれているものであったのだから。そして、手記を書く以前、本多から百子の写真を見せられたということが、透にとって百子と交際する——手記をつける——という本番を前にしての、言わば練習問題に匹敵する事柄ではなかったか。その本多から課せられた練習問題を解いてゆく透の有様を、次に引用しておく。

抽斗から出した一葉の写真を、かねて考へてゐた通りの自然さで、透の前の卓へ放つた。

写真を取り上げた透の態度こそは見物だつた。本多はこれを細大洩らさず眺めてゐた。(中略)

何といふ完璧な反応だ、と本多は考へた。年齢相応の凡庸な心のときめきを、(こんな不意の局面であつたのに)、透はほとんど詩的にやつてのけた。本多は、すんでのことで、それらすべてが、本多の望むやうに透が反応してゐるにすぎないといふことを忘れてしまふところだつた。(『天人五衰』第二十一章、傍点引用者)

百子の写真を本多から見せられた透の様子は、本多にとって、「本多の望むやうに透が反応してゐるにすぎないといふことを忘れてしまふ」程、完璧なものであつた。つまり、練習問題を見事にパスした、というわけだ。そしてさらに、応用問題として百子と付き合うことが本多より出題され、透は手記をその計算用紙として駆使し、ものの見事にそれも解いてしまふ。後に起こる透の婚約解消後、その原因となる百子の手紙を、本多は「お前が書かせたんだらう。」と言うが、透は驚くことなく、「いつか父がこれを訊くことを予期して」おり、以下の会話の応酬が続く。「お前は人生の処理の仕方の一つおぼえたといふだけさ。」「しかし、あの婚約から破談まで、お前は甘い男に成り了ててみせたぢやないか」「すべてお父様の意向に従つただけでせう。」「その通りだね。」「(傍点引用者) 透の身の処し方が、「すべてお父様の意向に従つただけ」と、実は本多の意に沿う形であつたことが、ここでも提示されるわけなのである。この身の処し方とは、透が洋食の作法を本多に教わってから持つようになった「習慣」であることは、まず否定できないと言つていいだろう。

百子との交際は、透にとつて、本多の教育を総合的に発揮する場であり、その本多から課せられた「習慣」（もうこの頃には「習慣」以上のもの、《性質》になつていたとも考えられる）は、透の持ち前の認識欲の上に成り立ち、猛威をふるうものだった。この本多に強いられてきた透の「習慣」は、親子の会話でその「習慣」が確認される程、父である本多の庇護を受けた過保護なものであり、そして、正に透は、この「習慣」にこそ《つかまれている》のだ。透は過去世を見たということ、そして、透にも他の転生者達と同様、《つかまれているもの》があつたということは、透が転生者たりうる資格を充分に与えられていることを示すものだ。それは、過去三人の転生と渡り合うような、死へと駆り立てる運命の要求としてはいかにもお粗末だが、それが、透に授けられた転生者としての運命の啓示でないとすれば何なのか。

### 三、夢日記

日記とは、本来、過ぎ去りゆくことがより鮮明に（結果的には）記憶されるべく、書き留めるものである。夢日記と言つても、見た夢が印象的なものであれば、日記として記録を施すことは個人の趣味の問題であつて、何ら可笑しなことではない。しかし、その夢が後に実現するのであつたら……と考えると、少々混乱するのを禁じ得ない。清頭が生きていた時点では、日記に記された夢は、清頭によつて見られた夢であるから、いわば過去である。その過去の記録なる夢日記が、これから実現するという未来の予定をも含んでいるということになるのだ。吉田三陸は、このことについて分りやすく説いているので引用しておきたい。

清頭の「夢日記」は、過去と未来を混合させ、小説の中に、タイム・マシンのような秘密のトンネルをこしらえ



るための、優れた文学的技法である。(中略) ハンス・メヤーホフというもうひとりの学者は、「未来とは、ちょうど一冊のノートのまだ書かれていない、白いページのようなものである。未来は、何の記録も持たないが、過去は記録を持つ。その点が違うのだ」といつて<sup>(注3)</sup>いる。ところが、もし誰かが、未来の出来事を夢の中で予見したとすると、その未来の出来事はすでにその記録を、たとえ夢の中であるにせよ、持つことになる。そうすると、メヤーホフの定義に従えば、この出来事は、はっきりと未来の事とはいえなくなる。このようにして、過去と未来とが融合して、その区別を失なうのである。

この夢日記を見て、それを焼き、透が自殺を図ったのは、過去しか見ることのなかった目への絶望からだ第二章で述べたが、この行為を別の観点から考察し、あるいはまた、夢日記の側から見るとしたら、どのような意味があるのだろうか。

清顕の夢の記憶を伝えてきた夢日記は、本多の手によって転生の確認が行なわれると同時に、夢が実現したということがそれによって示された。だが、一連の夢が転生と共に過ぎ去ってしまうと、後は全て、清顕が夢日記を記した時点と何も変りはなくなった。夢日記は、外見こそ古くはなってしまうが、清顕のいた頃のままだ存在する。そして、その内容の全てが過去になって夢が実現し終った時、夢日記は、ただの《見た夢のことが書かれている日記》となつてしまい、本多に代表される日常の時間の流れを過ぎゆくことになったのだ。では、夢日記が予言し、実現されていた過去は、本当にかつては現実のものとして存在したことがあったのかどうか。透は、その恐しさに気づいていたのではないか。夢が存在を許したものが、現実となり過去となり、かつてあったことも、そうでありえたかもしれないことも、夢も何もかも一緒くたになって、時が経つと共に現実から運ばれ去ってしまう。運び去られた、清顕、勲、ジン・ジャンの存在していた過去は、ある特権性によってのみ思い出されることになるのだ。夢日記の《夢と結ばれ

ているという特権性」によって。その内実(肉体)は存在していなくとも、現実世界と関わりを持つことが出来るのは、夢日記があるからである。夢日記がある限り、彼らは、この現実世界にかつては存在したことを主張し、透を脅かし続けるのだ。そして、透は夢日記を焼く。その行為は、夢の呪縛から開放を得るためであり、一方、夢日記にとっては、その役割を終え、日常の時間を過ぎゆく前に焼かれるということ、一段と完結性を得ることになったのである。「夢と人生」<sup>(注12)</sup>で三島は、『浜松中納言物語』について、「もし夢が現実<sup>(注12)</sup>に先行するものならば、われわれが現実と呼ぶもののが不確定であり、恒久不変の現実といふものが存在しないならば、転生のが自然である、と云った考へ方で貫ぬかれてゐる。」と評しているが、『浜松中納言物語』を典拠としたものとして、これと同じ性質を持っているとするなら、『豊饒の海』では、透が正にこの《現実の不確定性》を受けとめた形で書かれていると言える。それはつまり、夢日記の夢が実現していくという過程においては、夢と現実との等価性は意識に上りにくいものになっている。しかし、見た夢が現実になりましたことがあったが、それもまた過去となり……と、透のいる地点(全ての夢が実現してしまつて、透は確認するのみでいる)に立ち、それらのことを考えてみるなら、夢と現実、より等価なものと見出されるのではないか、ということだ。こうして透は、夢が現実世界に氾濫するのを堰止めようとして、夢日記を焼き、夢の呪縛から放たれ、失明してしまう。それは《夢の無い世界への旅立ち》であり、本多のいる通常の時間を生き続けることを、自らに強いる契機でもあった。また、透の、夢日記を焼いた理由「僕は夢を見たことがなかったからです」とは、夢に縛られることからの拒否を示す、強い意志の表れではなかったか。

さて、創作ノート<sup>(注13)</sup>では、

この少年のしるしを見て、本多はいたくよろこび、自己の解脱の契機をつかむ。(中略)  
本多死なんとして解脱に入る時、光明の空へ船出せんとする少年の姿、窓ごしに見ゆ。(傍点引用者)

とあるが、物語の最後に、果たして本多の解脱はありえたのか。夢日記の夢が一つ一つ実現していくに従って、過去と未来が一步步近づき、清頭のいた過去へと全ては収斂されていく。そして夢が全て実現されてしまうと、未来は過去とぴたり一致する。しかし、その時点では夢日記は存在するが、清頭もない、勲もジン・ジャンもない。何らかの形で彼らに関わってきた本多のみ、彼らとは隔たった現実世界に取り残されている。その彼らと本多を繋ぐ唯一の物である夢日記も、夢の呪縛から逃れんとする透によって焼かれてしまった。二十歳の清頭の死から八十一歳になるまで、本多の記憶に埋め込まれていた、勲、ジン・ジャンの生は、清頭のいた過去一点へと絞り込まれ、しかしそれも、夢日記消滅ということで跡形も無くなってしまうのだ。門跡の登場するラストシーンでは、そのことはさらに強調される。

「記憶と言うてもな、映る筈もない遠すぎるものを映しもすれば、それを近いもののやうに見せもすれば、幻の眼鏡のやうなものやさかいに」

「しかしもし、清頭君がはじめからゐなかつたとすれば」

門跡の言う「記憶」とは夢の記憶、つまり夢日記と呼応している。「清頭君がはじめからゐなかつたとすれば」とは、本多の、夢日記が焼かれたことへの不安が反映していると言つてよい。

本多の病氣——医者<sup>イサナ</sup>の診断によれば「良性腫瘍の脾臓<sup>スッパ</sup>腫」——を死の暗示として捉えるべきかもしれない。しかし、そうとらないにせよ、遠くない先に本多には死が予定されている。だとすれば、それまで本多はどうしたらいいのだ？ 過去のしがらみから切り離されたとなつては、最早、残された余生——希望をもつて言えば未来——を歩む術しか本多には残されていない。地位に無関係な本多は、高齢だということを考慮すれば、不自由しない財産を使つて、未来をいかにも生きられる。本多に青春があるとしたら、清頭のいた頃——「本多にとつて青春とは、松枝清頭<sup>まつえききよみち</sup>

の死と共に終つてしまつたやうに思はれた。あそこで凝結して、結晶して、燃え上つたものが尽きてしまつた。」（『奔馬』第二章）——と共に、それから六十年という歳月を飛び超え、再び本多に青春が訪れたのだと言えよう。未来にのみ目を向けるしかないという……。これは、果たして解脱というのであろうか。これを解脱というにせよ、そうでないにせよ、それは、未来へ放たれた『行為者』本多のみ知ることとなろう。

最初に述べた通り、一連の転生者を本物として扱うことを前提に、本論を進めてきた。しかし、転生者が贗物であるという可能性を全く否定しているわけではない。が、これを論じるには、最後の場面との矛盾が生じることを覚悟した上で、それを打開する意図をもつてしか臨めなれないと思われる。そしてこの矛盾とは、言うまでもなく、門跡による、清顕がかつて存在したことの否定に対する、本多の「それなら、勲もゐなかつたことになる。ジン・ジャンもゐなかつたことになる。……その上、ひよつとしたら、この私ですらも……」という衝撃的な言葉を、転生が贗物であつたということにより、骨抜きにしてしまうことである。そこに、作品世界を破壊するかのような危険性が伴うのは避けられないことであり、それよりむしろ、三島が『豊饒の海』の結末部分の構想を早くから描いていたように、論者としても、最後の場面を前提として論を進めていく方が、この場合よいと思われるのだが、どうだろうか。

#### 注

- (1) 長谷川泉「豊饒の海」(『彩絵硝子の美学』至文堂、昭和48・11)
- (2) 對馬勝淑「三島由紀夫『豊饒の海』論」(海風社、昭和63・1)
- (3) 佐藤秀明「『贗物』の主人公——『豊饒の海』論序説——」(『昭和文学研究』昭和63・7)
- (4) 野口武彦「輪廻転生のパラドクス——『豊饒の海』における行為者と認識者をめぐって——」(『國文學——解釈と教材の研究

——「平成2・4」

因にこの箇所は、高橋重美も「沈黙が語るもの——『豊饒の海』読解の危険性——」（『立教大学日本文学』平成2・7）の中で指摘している。

(5) 本文では手旗信号となっているが、旗旗信号の誤りだと思われる。又、それが表わす〈G〉とは、黄色と青の縦縞であるはずが、本文では「黄いろと白の縦縞」となっている。

(6) 小島千加子「幻の月光姫——『暁の寺』のくしび」（『三島由紀夫と壇一雄』構想社、昭和55・5）

(7) この記述により、モデルが不在となる以前から、三島が作品内の変更を意図していたかのように思われるが（モデルがいなくなつて、ちようどよかつたという具合に）、しかしこの言葉はモデルがいなくなつて1カ月経つてからのものであり、モデルの件とは無関係だと考えられる。

(8) 『豊饒の海』について「毎日新聞」昭和44・2・26

(9) 「夢と人生」（『日本古典文学大系77』月報、岩波書店、昭和39・5）

(10) 三島由紀夫「『豊饒の海』ノート」（『新潮』昭和46・1臨増）

(11) 吉田三陸「『豊饒の海』における空間化する時間」（『日本文学』昭和58・1）、また、引用文中の注3は、ハンス・メヤーホフ「文学における時間の問題」（一九六八年・カルフォルニア大学出版・四三）を指している。

(12) 9に同じ。

(13) 10に同じ。

（付記 本論で引用したテキストは、新潮社版『三島由紀夫全集』を使用した。）